

## 本とわたしの

### 周辺事態

愛知淑徳大学大学院  
ビジネス研究科准教授

三浦克人



趣味は読書だ。読書ノートをつ

けたりはしないが、A、B、C、D(優良、可、ハズレ)の四段階評価を手帳に書きとめている。昨年はちょうど一〇〇冊を読了した。うち、A評価

は八冊で、以下、三五冊、四七冊、六冊とつづく。足して一〇〇冊にならないのは、読解力の不足により評価を保留したものがあつたため。

ジャンルは問わない。スクリーニングはきわめて受け身で、いわゆる名作、賞をとつた作品、ベストセラー、識者の薦める本などが一応の目安となる。平時には見向きもしないオヤジ系雑誌(『GQ』『一個人』など)でも、いざ本の特集となれば、購入し参考にする。ハズレが少ないのは、この軽薄なやり口と、わたしという人間の重みとがシンクロしているからか。

ときには学生の紹介で読む本も

ある。たとえば、森見登美彦の『太陽の塔』。脇役のセリフ「我々の日常の九〇パーセントは、頭の中で起つて

いる」が心にしみた。フィクションの世界に浸るわたしは、この卓見においておおいに与するが、同調者を求めるほど愚かではない。

感想を語りあう相手は、もっぱら学生時代の友人たちだ。「定例会」と称する不定期な夜の集いは、丸善での待ち合わせからはじまる。みな(といっても総勢三人)、好みも読み方も異なるため、愚見がすれ違う。そんな消耗戦がなぜか心地いい。ハルキストの友人は「ねじまき鳥」の英訳本をいつもカバンにしのばせているが、ほんとに読んでいるのか疑わしい。二〇年以上も前に読んだ小説

の筋を詳細に語れる友人は、その芸を生かす場面もないまま課長に昇進してしまった。

学生に「本を読まない自由」はない。読書は学生の義務である。

わたしのゼミ(専門は会計学)には、夏休みに読書感想文を書く習慣がある。読むべき本の範囲は決まっております。「新潮文庫の一〇〇冊」

がそのベースとなる。これから、軽いエッセイ、子供向けの物語、わたしが未読の本を落とし、七〇冊ほどを残す。さらに学生が好みそうな作家(伊坂幸太郎、川上弘美など)の作品を加えて、「三浦ゼミの一〇〇冊ぐらい」が完成し、課題図書となる。近ごろではネットに書評があふれており、ズルがしやすい。実際、切り貼りの痕跡が残る感想文が提出さ

れることもある。もちろん、大目に見たりはせず、やり直しを命じる。拙くても自分の言葉で書かれた文章を読むのはいい気分だ。

感想文をきっかけに「義務としての読書」を卒業し、本の愉しみを知らせたい。ただ「大学に入つてま

で、こんな宿題がでるとは思わなかつた」「読むのはまあいいけど、感想を書くのが超めんどうくさい」というゼミ生の声もあり、習わしの存続がやうくなつていく。長久手キャンパス内の売店の書棚には、トリプルAクラスの時代小説が二冊ならんでいる。誰がいつ買うのか、あるいは返品されてしまうのか、ごく気になりはじめてから二年がすぎた。